生徒の皆さんへ校長メッセージ　２月１４日（火）　No. １２

gleam～唯一無二の光を集めて～

自分を俯瞰（ふかん）・客観視する。他者意識を持つ。役割意識を持つ。

中学生になると自分を俯瞰・客観視できるようになります。俯瞰・客観視とは、自分を他の人から見たらどんなふうに見えるか、考えられるようになるということです。自分自身を外から見ると言い替えることができるかもしれませ。

また、自分の気持ちや思いがこうだからと、その気持ちや思いを直截に出すのではなく、状況や相手の立場などを考えて適切に表現することもできるようになります。気持ちや思いをごまかすこととは異なります。自分の気持ちには正直に向き合いつつも、気持ちや思いのままに行動をした場合、周りの人に不快感を与えたり、相手を傷つけたり、いやな思いをさせたりしてしまうので、自分の気持ちは一端脇に置いて、相手に配慮して伝える、慎重に行動することです。

例えば、挨拶をされて自分では挨拶を返したつもりでも、声が小さくて相手に届かなくて、聞こえてなかった場合や、他のことに意識が向いていて聞こえずに、何の反応も返さなかった場合を考えてみましょう。
挨拶をした人は、あなたのことを無視した態度の悪い人だと捉えることでしょうし、「無視した」と言われた場合に、「言ったよ」とか「聞こえなかった」と返して自分の正当性だけを主張すれば、人間関係がこじれてしまうかもしれません。「ごめんね」、「すみません」と言いつつ、相手に届くように気持ちよく再度言ってあげるといいですね。

さらに、当番や何かの役になっていて、全体の前に立って会を進行したり、話したりする場合、自分は人前で話すことは苦手であっても、立場上しなくてはなりません。その時、どうようにそのことに向き合い、きちんとした態度で臨めるかが大事です。下を向いて、めんどくさそうにイヤイヤすれば、その場にいる人たちに伝わりますし、情けなく見えることはもちろん、みんなにも迷惑がかかります。自分の思いや考えを伝えることは、これからの社会において大変重要です。今練習しているのだと、堂々と努めましょう。向き不向きより、前向き直向きに取り組めばきっと自分の力になります。

裏面に続く

イソップ物語や童話に登場する「兎と亀」のお話から

亀の足が遅いのを、兎がバカにして笑った。
「あなたは足が速くても、わたしのほうが勝ちますよ」と、亀が言った。
すると兎は、「あはははは、そんなことはないよ。では、競争してみよう。そうすれば、わかるさ」と、言い、
「誰が場所を決めて、勝ったものにほうびを出すのですか」と、亀は言った。
「狐が公平でりこうだから、あれに頼もう」と、兎は言った。
そこでキツネが、競争をはじめる合図をした。たちまち、足の速い兎が亀を引き離した。
しかし亀はあきらめず、休まず歩き続けた。
兎は足が速いと思って安心しているから、途中で大きな木を見つけると、その木かげでひと休みした。それからしばらくして、兎は起き上がった。
「あれ、少し眠ってしまったか。まあいい、どうせ亀はまだ後ろにいるはずだ」。兎は大きくのびをすると、そのままゴールに向かった。
「よし、もうすぐゴールだ。・・・あれ？」
自分が勝ったと思っていたのに、なんと亀が先にゴールしていました。

この物語は様々な解釈がされていますが、重要なことが一つあります。兎が見ていたものは何で、亀が見ていたものは何かということです。兎は亀を見ていたのに対して、亀はゴール・目標を見ていたと捉えることができます。

他者と比較して自分が優れている、劣っているという相対的な違いを重視し、こだわるのではなく、自分は何を目指して、どのようになりたいかということがあり、そのことの実現に向けて直向きに、誠実に、地道に努力することが大事です。

心を育み、脳を活性化する読書

現在ヒットしている本や話題作、映画やドラマの原作本もおもしろいですが、純文学というか昔から現在までずっと読まれている文学作品に触れることも大変良いと思います。

下の枠囲みは私が中学生の時に読んだ本で、今でも印象に残っている作品のいくつかです。本校の図書館にもあると思うので、手に取って見てみてください。

「雪国」	**川端康成**	表現が美しいです。人生の哀しさ美しさが描かれています。
「人間失格」	**太宰治**	自意識や弱さ、生きづらさについて書かれています。
「三四郎」	**夏目漱石**	青年期における誰もが悩むことがテーマになっています。
「高瀬舟」	**森鴎外**	安楽死について考えさせられます。
「初恋」	**ツルゲーネフ**	人に恋することの思いが描かれています。
「狭き門」	**ジッド**	信仰と恋愛のはざまで苦悩する様子が描かれています。
「ペスト」	**カミュ**	感染症に挑む人々の様子が書かれています。